

7 韓流メディカルドラマ「馬医」のもう一人のモデル任彦国

吉村 美香

国際日本文化研究センター

韓流医療ドラマ「馬医」は、2012年–2013年に韓国で放映され、その後日本でも幾度と放映された。その主人公は実在した医官、白光炫（ペク・グァンヒョン、1625–1697）をモデルとしている。白光炫については昨年2020年度に経歴や業績をまとめてみた。

ところでドラマの監修者によると「馬医」のモデルは、実際には白光炫以外にもう一人いたそうだ。任彦国（イム・オングク、1506–1567）である。朝鮮半島南西部の全羅道井邑（ジョンウプ）の出身で朝鮮時代中期（明宗時代）に活躍した医員である。「馬医」は任彦国と白光炫の2人の医員の人生をモデルにしながらも白光炫だけを主人公としたのは、2人の生きた時代に100年以上隔たりがあり同時代の人物ではなかったこと、白光炫のほうが賤民から御医まで上り詰めるなどドラマチックな人生だったことからだそうだ。白光炫が外科手術に秀でていたのに対して、任彦国は現代にも通じる外科手術の方法論を多く確立したという業績がある。

その頃の朝鮮半島では、衛生などの問題によってできた腫れ物（おでき、腫瘍）で命を落とす人々が多かった。というのも儒教の教えが浸透していたために、身体や髪、肌は両親から受け継いだものだから外科的の手術をすることに抵抗がある人が多かった。そのために専門的に腫れ物だけの治療を行う医者たちは「治腫」と呼ばれていたが、彼らはやはり鍼灸や薬による治療を行う程度で腫瘍を根本的に取り除く治療は行っていなかった。

任彦国の経歴については明確なことは分からない。医術は老僧から学んだという説や老婆から学んだという説もある。鍼術で母親の持病である腫脹を治療するなどの腫瘍治療の名声を聞いた人々が彼の治療を受けようと殺到した。その数は数万人にもものぼったそうだ。このような功績により禮賓寺（イエビンサ）の主簿に任命されている。

手術の実績は多くあったが、学術的に勉強したわけではないにも関わらず著作も残している。主要著述としては腫気治療に関する外科的医術の専門書である『治腫秘法』1巻（1559年、安瑋により刊行）や『治腫指南』2巻（出版年など不明）がある。『治腫指南』2巻では任彦国の独創的な治療法が紹介されている。破鍼法や切開手術法などが治療の説明文と絵によって紹介されている。腫気の治療についてだけでなく多様な病状について治療法が紹介されていて総合的な医書である。ただ2巻の内容に重複しているところが数ヶ所見られる。始めから終わりまで任彦国が通して書いていたならそのような構成にはならなかったであろう。出版年、出版者なども不明であることから、任彦国の口述を弟子たちが書き留めたものが数冊にわたってあり、それを後年2巻にまとめたのではないかと推測できる。

実際、朝鮮時代の外科手術のルネッサンスがつまっているような画期的な人物だった。専門的に医学を習ったことがないが、経験や実践が重要だと考えた。馬夫が馬の腫瘍を治療するために焼いた灰を傷口に塗るのをヒントにその治療法を人に応用したり、腫瘍を切開するメスを自ら開発して十字切開をしたり、経験的に知ったのか手術後には塩水で患部を消毒しゴマ油や膏薬を塗る消毒殺菌法など術後の炎症を防ぐ方法を知っていた。根本的には現在の化膿治療と大きな差異もなく、当時としては革新的で画期的な方法だった。まさに時代を先んじた先駆者だった。

朝鮮時代の医学は本草学や内科分野が高水準で、外科手術の分野は全く発達していなかったイメージがある。しかし三木栄も任彦国の治腫術、特に『治腫指南』を紹介し、“この方法は普通の鍼医の術と全く違い、科学に根拠する観血的技法が加えられ極めて優れたもので当時の大陸外科学の水準をはるかに凌駕する”と評している。近代の西洋医学の外科技術の伝来を待たずして16世紀の朝鮮半島に既に近代の外科手術の萌芽があったといえよう。